

昭和三十四年七月二十三日
第三種郵便物認可
（毎月一回、十五日発行）

（通第一三五号）

慈

光

第十二卷

第六號

目次

横	超	断	四	流	近角常観	(1)
応に無量寿仏を称すべし	「源左」に腹を立てた昔噺	正信 偈 私 偈 (十七)	正信念仏偈意訳		花田正夫	(9)
					辛川忠雄	(13)
					白井成允	(15)

一 人 生 問 題

横超断四流(横ざまに超えて四流を断つ)とは、広大のお慈悲が聞えるなり、私共の長の迷いの根本が断ち切られることである。この私共の實際喜ばして貰う上より最も有難い所で、真の私の思召しが頂けるなり、善き悪しきに就きての、総ての私共の娑婆の思いの根が断ち切られて仕舞うのであります。

この事を先ず人生問題の上よりお話しする。殊に昨夜は談話会に於いて私自身の経験をお話したのであります。総てこの人生上の問題は、それが道徳上より見てたとえ善であり悪であつても、この私の御真意が聞こえるまでは、要するに皆相対的たるを出でぬのであります。昨夜もお話したのであります。第一私自身が、お慈悲に気付かせて貰うまでに色々考えたことにしても、私が子供の時より最も頭を悩ました問題は、この仏教ということであつたのである。「仏教の為に尽くさなければならぬ」「仏教を振興せしめなければならぬ」「それには仏教界の悪弊を改革しな

ければならぬ」と、随分誠心誠意、私としては力の限り骨折つた積りであつたのである。又自分の修養道徳という点にしても、自分としては全身を捧げ、悪しきは飽くまで自分が引き受け、善きは飽くまで人に与え、何処までも誠実に言うことに於ては、充分努めた積りであつたのである。けれどもその、然うして居つた事が、残らず皆間違ひであつたということになつて仕舞つたのであります。これは言うまでもなく、私共が道徳上より見て、真に立派な遣り方と思はれる如何なる事柄に就いても同様にみな言われるのである。

即ち私の場合にする時は、私がかく長い間仏教に骨折つたと思つて居つた事も、あとより考えれば、つまり一種の國家觀念の如きをもつて仏教に対して居つたに過ぎなかつたのである。即ち自分が仏教故、この仏教の為に飽くまで尽くさねばならぬと、即ち自分が真にお慈悲が有難くて、人に知らそうと骨折つたのではない。「自分が仏教の家に生れたから」と、仏教のために骨折つたの故、即ちキ

リスト教のために仏くから、仏教の者も仏教のために一生懸命にならなければならぬという立場である。詰まるところは何もかもが、このわが仏尊し、でやつて居つたに外ならなかつたのである。故に遣りつつも私としては其間に於いて「自分は何処までもよく遣つて居る」との念が如何にても離れ難い。故にそれ程一方に真面目に遣りつつも——又私としては、實際真面目にも遣つた積りである——遣れば遣るだけやらぬ人を見ると、終に不足の念が起つて来た、ということになつたのであります。

二 私 の 行 き 詰 つ た 所

それも初めの間にあつては「なに人が遣らなくても、自分さえ真面目にやつて居ればよい。人が自分に悪くしようとも、自分の方から何処までも善くして行けば、結局人も善くなるのだから」と、見るもの、聞くことに對し、当初はすべてこの陣立てやつて居つたのである。

ところが人間には最後になると行き詰るといふことがある。その最後に行くとき、人間の本性が遺憾なく現われてくる。それで私は真面目に／＼とやつとるの中に、とうとう最後に行き詰つたのである。そのため自分の身も心も疲れ切つて、弥々多年開法のために真面目に／＼考えた、その最後に至つて私の行き詰つた事は

「自分はこれ程真面目にやつている。しかるに他を考へ

ると、どうも人は真面目にやつて居ない」

——ここは私は思うさま懺悔さして貰います
「自分は現にこれの通り、この為に身心悩乱の苦しみに陥入つて、悶絶して居るのである。この仏法のためには自分は生命までも惜しくない、投げ出してやつて来たのである。それにもかかわらず、世の中は、真面目々々と言つて居るけれども、弥々本気に真面目にやつとる者として一人もない、これはおかしなものである。斯うだとすると世の中は実に強い者勝ちである。自分の如く真面目でやつとる者は、遣ればやるだけ人の下敷き、埋め草となつてしまふばかりである。世の中は、これは如何にも変なものである……」

とこの疑いに行き詰つたのであります。何故にこんな疑いが出て来るか。人間は実にひどい者で、自分の立場のある限りは人に善くし、忠実に考へることも出来るのであるけれども、肝腎の自分が立てぬとなつて来ると、今まで、「法の為である」「正義の為である」と言うて居つたことが、実は皆、自分を本としてやつて居つた仕事である。故に一度自分が成り立たぬとなつて来ると、あれも可かぬ、これも可かぬとなつて、これが本となつて、人生すべてがいけなくなつて来るのであります。

そして一度、こうなつてくると、如何なるものも世の中

に一として善いものとは無くなつて来る。「甲の友人も可かぬ、乙の男も変である、誰も彼も……」という具合になつて、前は道徳上、宗教上、極められるだけ理想を高く持つてやつて居つた積りである。処がかく弥々いかぬとなつて見ると、今度はそれだけ裏が来て、普通の人以上にも一倍疑いが深くなる。終には道行く人までが「あれは皆嘘をやつて居るのである」と、この疑いの心が段々四方八方に一杯になり「自分も可かぬ、人も可かぬ」と、唯々悶え苦しむ外なくなつて来たのである。

このことは自分で経験して来た事故、私には能く分る。恐らく理想的の青年の方の中には、必ずここに行き悩んで居らる方がすくなくなろうと思ふのであります。理想的の青年の方は、すべて理想をもつてこの世に立とうとして居られるのである。それであるから、自分の理想にあわぬと、如何なることでもみないかぬとなる。そして第一理想に合ふような事をして居る自分自身がいかぬとなる。すると「自分のような悪いことでは可かぬ」と、之が最後の問題となつて来るのであります。

三 生 死 流 転

そこで私にする時は、今まで人が如何に自分に悪しく向つて来ようとも、自分の方よりは飽くまで憎まず、悪しくせぬと思つてやつて来たのである。ところが、今かく實際

に於いて、人が自分のやつて居ることを察してくれぬ、となる、かくまで不足が出て来るといふは、こは矢張り、今までの人が相手をやつて居つたのであるからである。人に褒められたい為によつて居つたのである。

と、かく段々気が附いて見ると、自分が本當に仏教のため身を捨てても不足がないならば、こんなことはないはずである。それにこの不足が出て来るといふは、こはつまり今までの「自分は身を捨てる」と言いつつ、実は自分が法のため宗教のため尽して居ると、之を人が見てくれるという心でやつて居つたのである。この人が見てくれぬとなると如何にしても満足が出来ぬ心故、これは今までのことが、人に善く言われたい為に、やつて居つたより外なかつたのである、ということになつて仕舞つたのである。

すると、これまで立て通して来た処の理想が反対にここで目茶々に砕けてしまひ、最早どうしても再び立たれなくなつてしまつたのであります。

さてこれを私は何故言ふか。世の中は、善い方であつても悪い方であつても、人生は総て生死流転であつて、善きことをすれば、その善きことをするのが迷いの種となつて行くのである。又悪しき方なれば「自分は悪い、こんな悪い心が自分にあるとは、人は思つていないんだらう。こん

な名譽心、卑劣な根性があつたとは、人は思つて居ないんだらう……もう一つ行けば「彼奴は何だか自分の顔を見て、妙な顔をした、きつと自分の事を悪く思つて居るのだらう。人に悪く思われたとすると、もう自分の方より引下つてしまふより道がない」と。終には「こんなことなら、生きていたつてしようがない。若し石が地に落つる如く、自然に死ぬることが出来るものなら、一層死んだ方が楽である」と、こういう迷いに墮ちこんで行つたのである。即ちこの私の、高きと低きとの迷いである。即ち善き事をすれば善き事で執着がついて来、悪しき方になれば悪しきで何処までも執着がついて来るのである。即ちこれが私共の生死流転のありさまなのである。

即ち私共はこれで今日も明日もと暮していくから、一年でも二年でもこれを続けてゆく外なくなつて居るのである。終に生をかえ、世を換えて、次の生までもこれで送つて行く。これが私共の生死流転の有様である。業報に縛られて苦しんでいる有様なのであります。

四 業報ということ

さてすれば、どうしたらばこれを断ち切ることが出来るのであるか。長い間、初めは自分が善いと思つてそのために苦勞し、のちには自分が悪いと言つて、ために悔んで居るのである。かく善ければ善きにつけ、悪しければ悪しき

につけ、何処までも人と五分五分が起りて、隔て心を来たし苦しみをする。堪えられないから断てるものなら何としてでも断ち切り度いのであるが、如何にしてもこれが断ち切ることが出来ぬのである。

自分の方から先きに五分五分を止めれば、人も止めると思ふけれども、その自分の方から先きに止めることが如何にしても出来ぬ。人さえ止めてくれれば自分の方も止まらうと思ふけれども、人が止めてくれぬからいつまでも止まりようがないとなる。

かくいつまでも人と不仲で居るは、つまらぬとは分つて居た、分りながらも如何にしても止められなかつたのが、これが私の苦しみであつたのであります。故に私はこれが前世の業報であるといふ。

業報という言葉は、仏教の上では、これも業報である、あれも過去世の因縁であると、何となく一種の運命主義の如く聞こえ易いのであるけれども、業報とは、この五分五分の考えが何時までもつきまとい、これから離れられぬところが業報であるのである。

即ち私にする時は、この五分五分で、何時までも苦しみより出られななんだ有様が、恐ろしい業報の姿であると思ふのであります。

で業報は、必ずしも道德的に悪いことばかりが業報と限

らない。彼の人にこれこれの恩を受けたから、これを返さんならんと考えるのも、矢張り業報にまわられているものなのである。即ち彼の人にこれこれの大恩があるから、義理上恩返しをしなければならぬという、義理の業報にまわられて居るのである。

極端に言うると、途上で人が蹴んだ、「あいつ蹴んだな」と、もうそれが忘れられぬ処が即ち私共の業報なのである。故に業報のものは極めて些細な事柄から始まるのである。設えは道で人に遇い妙な顔つきで自分を見られたとする。すると「あいつは変だな」と、極めて僅かの事柄なれども、夫れから夫れへと段々に尾緒がつき、しまいにはそれが持ちもかつきもならぬようになつてくるのが、業報の有様である。恰も手毬程の雪の塊であつたのが、それを転ばし／＼している中に、終に大きな雪達磨となつてしまふ具合なのであります。

このことは、私など非常に邪推深く、大いにやつたからよく分る。しまいには私など、さういう具合に飽くまで持つて廻り、邪推深く考える自分の方がいかぬのであることも能く分つていたのである。いかぬと知つたけれども、如何にしてもそれを取り去ることが出来ぬ。この点に私は大いに苦しんだのである。私など善いも悪いも皆自分がいかぬのであることまではよく分つていたのである。分かつた

けれども、その可かぬことが、如何にしても止まらない。故にその止まらぬのが自分がいかぬと、この点一つに大いに苦しんだのであつたのであります。

五 私に最後に思つたことは

ところで、茲に言わんならぬのは、平素仏教を聞いた者に於いては、仏の思召しを聞き、信仰が獲られると、その業報が切れ安心が出来るのであろうとの、或種の予想がここに附いてくる。これがある間はいつまで経つても可かぬのであります。

即ちこうやつているうちには、何時か分るだろうと、即ち問題がいつかは／＼になるから、これでは何時までたちてもいかぬのである。

ところでこれでは忽にして間に合わなくなつて来る。現に私などこれまで信仰々と、十年廿年これでやつて来て、それが終にかく駄目になつてしまつたのである。故によく世の中に「自分の信仰はもうこれ九分通りまでは本當にいつている、もうここで最後の感激さえ一つ与えられれば」と、こういう風に思っている人が随分ある。そんなこと思っているのが皆駄目なのである。これは九分まで親鸞聖人の真筆に違わぬと思つても、あと一分怪しかつたら、もうその物がいかぬのであります。

故に私共は自分に安心が出来るだろうとの思いが残つて

いる間は、如何なることありても安心することは出来ぬ。そこで私として思いましたことは、

「自分は長い間、信仰々とやつて来て、それでかく行き詰つてしまつたのである。今までこれだけ信仰じや、安心じやと言つて来て、それで斯ういかぬようになつたのであるから、今後どれだけやつたにしろ、もうこの道では駄目である、仏の慈悲も自分には間に合わぬ」

ただ心に臆気ながらも思つたことは、

「自分じやとて、長い間仏教じや、宗教じやと、骨折つたのも、決して事悪しかれと思つてやつたのではなかつたのである。けれども結局こういう具合にそれが皆駄目となつて見れば、最早や一点の取り得もなき自分である。その自分を決して善いと人から言つて欲しくはない。又今となりて見れば人生的に成功を望もうとも自分は思わぬ。むしろ死んでしまひ度いぐらいである故、生命を惜しいとは決して思わぬのであるけれど、唯一つどうにも死ぬにも死なぬ処の憾みがある。夫れはかく冷やかな、光の無い人生、強い者勝ちの人生に、自分は人の下敷きとなりて死んでしまふのであるとしてみると、これでは如何しても世の中が成り立たぬ。ああ誰かありて自分がこのようなことで苦勞をしている心中を察してくれて『哀れ可哀相である』との一言を懸けて呉るる者はあるまいか。若しその人があ

りて、この苦しい胸中を一点見て呉るる人さえありさえすれば、もうそれで自分は仆れでも充分である。決して生命を惜しいとは思わぬのであるけれども、このして見ようのない自分の衷心を、人生に於いて誰でもよい、たつた一言、——それも決して自分をよいと言つて貰うことはいらぬ。むしろ悪いと叱つて貰うてよけれども、そのお前のさういうようになつた処が如何にも可哀相である、お前にして見ればさうなつて行くのが如何にも無理がない。故に自分はお前が如何に悪しかろうとも、その悪しきが如何にも哀れでならぬ故、自分だけは飽くまで見てやるぞ、どんな事あつても決して捨てはせぬぞ」

と、もうこの一言である。この一言が私はほしくて／＼ならなかつたのであります。

そして私はそれを何処に目を着けたかというに、今云う如くに、私は第一、仏を振り捨てて居たのである。多年仏教じや、信仰じやとやつて／＼やり抜いて、その筆句にこゝういう風になつたのであるから、仏教では最早や安心は出来ぬとなつて居たのである。故に何処ぞにそのような友人はあるまいか、同情者はあるまいかと、私はこれを人生に求め廻つたのであります。

六 氣附かして貰うたは唯ひと所

そこで先生の処へ行つてこれを聞いて見るが、先生の言

われることでも安心は着きかねる。枕頭にお聖教はある、読んで見ても一向分からぬ。大経五悪段を読んで見ても、悪いのがいかぬとのが書いてあるように読めて、思うような事は一つも見つからぬ。これまで私は半年の間悩みに悩んだのである。そしてとうとう最後まで私は、そういう親切な言葉は聞かれないでしまったのである。

そこになると私は、全く誰からも聞かして貰う機会無く、苦しみに苦しんだのであります。ところが、これが平日御聖教を頂かして貰うていたおかげ、善知識の御教化を蒙つたお蔭であります。或る日ふと病院からの帰り道に氣附かして貰うたのである。それはふと何気なく、仏の広大の御呼び声に思い至つた時、今更の如くに、その広大の思召しであることが有難くなり、その時に

「あゝ今迄長い間、この善く出来ない者が哀れ、可哀相に思うそのの同情の言葉が欲しくて／＼ならなかつたのであるが、仏が悪しきを捨てぬとの仰せは、実にこの広大の御同情のお言葉であつたか」

と、唯これ一所であつたのである。私はそこに氣附かして貰うなり

「あゝ今日まで、仏までを無きものにして、一点の光り無き、石、瓦、炭団、鉄、土塊の自分であると思つて居たのであるが、その私のその心中までを見て下され、その汝

と、こういうことになつてしまつたのであります。それでここは私極端に言うが、それまでというものは、私は親しい友人に対してなど、親しければ親しき程よけ不足に思えてならなかつたのである。

ところがこの一念に私は今まで断金の交わりをして居た友、殊に宗教上の事に就けても、終始事を共にして居た友、その友をも一方に於いてはすつぱり離すことが出来るようになつたのであります。それまでというものは、私は何んだか、飽くまで事を共にする考で、中途で盟いを破られたような心地がして、その友が憎くて／＼しようがなかつた。そして斯く憎む裏には、何とかしてその友を無理にも引き止めて置きたきような心地がしてならなかつたのである。かく云うは多年の盟友秦君が「こんな宗教界は」と見切りをつけて、宗教界を棄てて去つたのであります。故に私にすれば、それまで、外の者はどうでも、自分等二人はと思つて来たのが、思いがけなく一人ポツチにされてしまつたのである。故に私はとうとうそれがもつたになり、甲の友人も変である、乙もいかぬと、終にすべてが駄目になり、いよ／＼前記の苦しみに陥入つたのであつたのであります。

が如何にも可哀相である、心の中の淋しさは、察するぞ、その汝の為あらわれた我であるからは、何処々々までも、私は捨てはせぬぞと、仰言つて下された仏であつたのか」

と、もうここ一所であつたのであります。それが自然に自分の上に分つて来たもの故、さあ私は有難くて／＼しようが無い。

「我が心をそれ程までに先から仏の方から知ろし召して、仰言つて下されたお慈悲であつたのであるか、さてもさてもお慈悲の有難さよ」

と、かくこの時初めて知らせて貰うなり、私は思いがけなく、今迄の人生が、ここですつぱりみな断ち截れてしまつたのである。即ち

「我が心の奥底までを同情し、哀れと語りて下さるは、もうこの仏ばかりであつたのである。これでなくては安心の出来ようはずなきわが心であつたものを、これを自分は長い間、人によりて求めようとして居たのであつた。この我が心の悪くしてしようが無い、そこを飽くまで見て下さるは、もうこの仏を外にして無つたものを、それを何処までも人に持ちて行き、人が見てくれぬ／＼と、不足を言うて居つたは、実に我ながら呆れた奴であつたわい」

花祭りの歌

- (一) 大聖世尊いでまして 今三千とせになりたまう
花の御堂にみすがたを ことほぎまつる誕生会
- (二) 花さき香うルビ三圍 天上天下ただひとり
我尊しとのたまひし みこえはいまも世にひびく
- (三) ほとけ此世にいでましし 大御心はわれひとに
あみだほとけのみめぐみを しらせんためとき
給う
- (四) 父と母なるみほとけの 慈悲のひかりにいだかれ
て御名をとなえつはらからが つどいあそぶぞ樂
しけれ

求道日曜学校作

応に無量寿仏を称すべし

花田正夫

「応に無量寿仏を称すべし」とは、極悪最下の衆生の永劫に浮ぶ瀬のない者への善き人の仰せの極みであります。大悲の至極であります。観経によりますと、

『下品下生』とは、或は衆生有りて、不善業を作り、五逆・十惡、諸の不善を具せん。かくの如きの愚人、惡業をもつての故に、まさに惡道に墮し、多劫を經歷して受苦きわまりなからん。かくの如きの愚人、命終の時に臨み善知識の種々安慰してために妙法を説き、教えて念仏せしむるに遇わん。この人苦に逼められて、念仏するにいとまあらず。善友告げて言わく、

〃汝若し念ずること能わんば、
〃汝若し念ずること能わんば、

〃汝若し念ずること能わんば、
〃汝若し念ずること能わんば、

時、金蓮華のなおい日輪の如くにして、その人の前に住するを見ん。一念のあいだの如くに、即ち極樂世界に往生することを得ん。……………云々。

とあります。親鸞聖人は『唯信鈔文意』にここを次のように、分り易く説かれて、

「汝若し念ずること能わんば」というのは、五逆十惡の罪人、不淨說法のもの、病の苦しみに閉じられて、心に弥陀を称念したてまつらば、ただ口に南無阿弥陀仏と称えよと勧めたまえるのみなり。これは口稱を本願と誓いたまえるをあらわさんとす。

「応に無量寿仏を稱すべし」とのたまえる、この意なり「応稱」はとなうべし、となり。

とあります。明遍僧は法然聖人の勧められる選択本願の念仏を「お・粥の念仏」と深く頂戴していられます。どんなものをも消化する力のない胃腸のおとろえた重病人には

お粥しかない、自分もまたこのころの重病人であつたと氣附かれ生涯念仏のお粥を頂かれたことはあまりにも有名であります。

又大疑団に逢着せられた道禪師四十八歳の時、玄忠寺の曇鸞大師の墓前に参られ、そこにある大師の碑文に

「……智恵淺短にして念力等しからず。草を置いて牛を牽く如く、心を常に槽欄にかけしむべし、若し放縱にして帰するところを得んや云々」

の一文に驚かれて「大徳すでに智恵淺短にして牛に等しとまで言われている。余が如き小子云々」とたちどころに、「念仏の草」を生涯の糧とされたのであります。

宗祖の道禪和讃にも、安樂集の意を汲まれて、
縦令一生造惡の
衆生引接のためにとて

称我名字と願じつゝ、
若不生者とちかいたり
と讃えていられます。

ここに他山の石として、国木田独歩氏の臨末の言葉を引きますと、この仏意の深さが、よく知らされます。

即ち、植村牧師を唯一の師として基教に入つた独歩氏の臨終に、牧師の最後の祈りの勧めをうけて

「言葉だけで祈ることは容易であるが、真の祈りは至難である。この祈り得ない者の救いはないであろうか」

明治十七年六月死

五月十三日午後三時、独歩氏号泣す。とあります。

この心から真に祈り得ざる者とは、「病苦に逼られて、心に弥陀を称念することの出来ぬ者」の代表者であります。この独歩氏の耳に、

「言葉だけより外ないのだ。心は苦に逼られてどうすることも出来ないのだ。その者に口に無量寿仏と称えよ」
との、切なく遣る瀬のない胸中のすべてを知りつくされ、そこが可哀想であるとの、この仏の勧めを聞くことが出来たらどんなにか嬉しかつたであろうか、満足したであろうかと想うにつけ、この独歩氏の叫びこそ、私共のドン底の声であると知らされ、そこに間髪をいれずあらわれて下さる大悲の念仏のただごとでないことをいよゝゝ渴仰申すこととあります。

池山先生は、ニイチエの『ツアラストラ』をよく引用されて、念仏をお勧め下さいましたが、そのうち

「人間の体験し能うものの最大なるものは何ぞや。そは大いなる自悔の念の起る時、即ちこれなり」

を引かれて、
「成る程、自分で自分をみさげはてるという事は最も偉大な経験であろう。然しそれだけでは人生は悲惨の一事に終る。唯こまでつきつめたニイチエに、弥陀の本願を聞き得たらとおもう」

と言われて、先生は念仏して居られました。
又先生はよく、石川啄木の歌、

「かなしきは飽くなき利己の一念を
もてあましたる男にありけり」

を引かれて、「啄木は、ここまで自分の姿が見えているのに、歎異鈔を読んでくれたら」と述べられました。

私の六高時代の先輩で、西田博士に呼ばれて京大の哲学に入つた秀才がありました。ところが卒業前に頸推カリエスになり、廃学して療養を続けて居りましたが、病氣は段々悪化するばかりで、両親も無い孤独の人とて、叔父さんの家で寝たきりで居りました。その頃友人の一人が見舞いに行くと、病室に一冊の本もないので、そのわけをたずねると

「この病氣になつても初めの程はあれこれと手当をしたが、もう不治とわかつた。それでも今日まで書物を手放さなかつたのは、自分にひかりが欲しかつたのだ。そして読めば得られると思つていた間は、朝から晩まで読み続けたが、今では読んでもわからぬ、となつて了うた。」

と淋しい笑いをもらしたので、種々はげまして帰つたが、自殺するのではないかと案じられてならないと言つて居りましたが、程なく最悪の報せを受けたと、友人が長歎

「仏の慈悲を有難く思える様になつた事が有難いのではない。有難く思えぬ奴を相変らずお相手下さる事が、有難い事である」

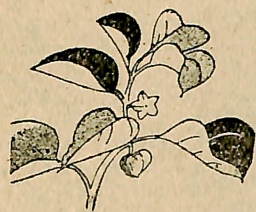
とあります。この「有難く思えぬ奴を相変らずお相手下さる」とあるのが、「汝若し念すること能わずんば、まさに無量寿仏を称うべし」の大悲であります。

こうした大悲は地上にまたとない心であります、不可称不可説、不可思議の心であり、私共のついのよるべはここに定まるのであります。

ひとすじの 綱よりほかに救いなし

千尋のたにに おちしこの身は

説人不知



息をして知らせてくれました。その時に、一切経を五遍も説破された法然聖人が「經典を披覽するに、その智ひるがえつてくらし」と四十三歳の時、血を吐く思いで告白された故事を思い浮べ、そこに選択本願の念仏の無碍の光益をいよいよ感佩申しました。

同時にまた、幸に日本に生れながらも、その御縁のなかつた友のいたましが身にしむことであります。
又私の学友のS君が、医大の三年の春亡くなりましたが、その時、

「自分は医者になつて病氣をなおしてあげようと思つて今日まできたが、自分が駄目になるとは知らなかつた」とつぶやいた時、あらゆる慰めの言葉もつきて、病床寂として声なしでありました。このあらゆる人の言葉のつきるところに、

「応に無量寿仏を称すべし」

の仏語がひとり光りを与えて下さるのであります。然しその時誰の口からも、誰の心からも、この仏語はもれず、あらわれずに、別れたことであります。然しすでに三十余年の星霜を経た今日も、私の胸には昨日のことのように刻まれて居ります。

最後によき教をのこして下さつた安波勲八医師の遺文に

聖語抄

自己の愚を知る愚人はまさに善慧を得べし。

自ら智ありと称する愚人は愚人中の愚人なり。

出 曜 經

仏言く。天下の愚人、ただ人の悪を見て自らの悪を知らず。ただ自らの善を見て人の善を見ず。己れを智と称する者は皆智に非ざるなり。自ら明におる者はその迷いはなはだし。

法律三昧經

若し多少聞くことありとて、自ら大なりとして以て人に憍らば、これ盲の燭を執るが如し。他を照せども自らは明らかならず。

法 句 經

源左に腹を立てた昔噺

——おらがやあなもんの自覚——

辛川忠雄

源左同行について一度ゆくり寄稿したいと考えてはいるが、柳先生にも、羽栗師著書にも発表してないので、源左はやはり生き佛さまではなくて、ただの人間であつたなあ、と私がこの眼でたしかめ、この眼で見届けた源左の一面を御紹介することにします。

然し源左の自覚はあくまで『おらがやあなもん(者)をようこそなア』であつたから、おらがやあな、という、この罪業深量の源左の自覚を、この一挿話が一層はつきりさせるのであつて、ともすれば、源左は妙好人であつて、いつもその心は浄土に住み遊んでおるもの如く錯覚せられては大変であつて、著書で続むだけの人々は凡夫の源左、人間としての源左を見失いがちだから、それでは源左はかえつて心外だらうと思われるので、ここに特にこんな古い出来事を紹介するのである。前口上はこのくらいにして、さて本論だが——。

それは昭和四年か五年かの秋、私が京都から自坊に帰つ

た年だつたが、私の弟が腸チブスをやつた時のことである。伝染病を恐れて近所も檀家も誰一人として寺によりつかない。そこへたま／＼源左が訪れたのだから、われらは地獄で佛に会つた気持で、母は源左にたよる。

源左は紙の行商と共に、獣の胃をアルバイト的に商つておつたから、この時も熊の胃か、なにかの胃を病人にのませたにちがいない。胃は相当高価なものだが、そこは源左のこと、原価計算はおろか、その代金さえ貰つたり、貰わなかつたりで、私の寺とて例外ではない。

ともかく、母を助けて看病をしてくれたのだが、問題はこれからのことです。わが寺の総代某家もまた源左の熱烈な信者であつたから、彼がこの町に来ると、寺を宿にしたり、総代に引止められてそこに泊つたりして、三日でも、五日でもとう前しては毎夜のように源左を慕う同行衆と共に御縁にあうのが例であつた。

ところが、この度は寺の次男が悪疫だ(あやく)というので、総代

は寺には寄りつくなど忠告するし、私たち寺族は寺族で、彼を相談相手にする。拒絶(きよげつ)の出来ぬ好々爺源左は、心は二つ身は一つ、おそらく進退きままつたにちがいない。忘れないが源左が逃げるように下駄をはくのに私が追いつがつた時、源左の狼狽(ろうばい)振りは今もハッキリ眼に残つておるが、それにもかかわらず彼は私を振り切つて、総代某家へ去つたのであつた。

この時、私はたしかに源左に失望した。そして

「源左も凡夫なり！」

と、世間で生き佛といわれたものの限界を見届けて、大きいため息と共に、玄関に腰をおろして果然と彼の後姿を見送つたことであつた。

この瞬間(しゆんかん)のこの時の光景が、三十年経つた今日でもハッキリ忘れずに記憶せられておるのは、源左も矢張りただの人間であつたというこの失望感が余程深刻に印えたらしく、今からふりかえると、源左本人は病気が染るなどのことには無神経であつたろうが、総代からは「寺に行くな」といつても、見舞わずには居れなかつた源左だけに、なが居をすると、この大檀那に叱られたり、心証(しんしやう)を害することはたえられなかつたのであろう。自主的な行動よりも、他人の立場で物を考える源左、多少の慾と名利心は温存する源左、若い住職の哀訴をふり切つても、力についてまわらね

ばならぬ源左の弱い人間性をもつと克明に記入して、後日の源左研究の参考にとも考えるが、ここでは何等の奇蹟も絶対になかつた、ただの源左であることを証明する一例を寄稿したに止める。

これは源左にケチをつけるためではない。源左の真実を伝えたい熱願からである。だから、年頃源左はお浄土で、そうだ、そうだ、ほんだ、ほんだ、その通にであつたと、源左の自内証である「おらがやあなもん」に忠実に、この発表に対して満足の微笑を送つておるのであろうと、又しても凡夫のへらず口を叩いて、彼が飽くまで妙好人としての尊い所以は、彼が、

「おらがやあなもん！」

の自覚に徹したというにあることを語つておく。

「中外日報」世五年、五月十二日、所載

あとがき

辛川さんとは名古屋別院で二十年も前にお目にかかつてから不思議に忘れ得ぬ求道の友として交誼を得ました。当時は北海道や台湾と、東奔西走して居られましたが大戦となつて、学校につとめられ、終戦後、痼疾のために病床の御生活。死の横顔を常に眺められながらも、心気は憂鬱。昭和の子規居士の趣を聞き、常に畏敬して居る友であります。鳥取市で奥さんは飲食店「いなばや」を開かれ、辛川さんは自坊に寝たきりでありましたが、縦横無尽の健筆をもつて『のれんと山門』のパンフレットの発行や、中外紙への投稿を続けられ、最近では、テープレコードを活用されて門徒の方々に声の慰問と教化を続けて居られます。鳥取県用瀬町、正覚寺、が御住所であります。 聚墨生

正信偈私偈 (十七)

白井成允

正信念仏偈意識

一 帰敬序

量りなき おほみいのちよ、
おん恵み 尽きぬ みほとけ。
思ひ得ぬ おほみひかりよ、
おん覚り 奇しき みほとけ。
おんみにぞ われら ひたすら
依りまつり 帰りまつらふ。

二 依経段 「弥陀章」

(一) 弥陀成仏の因果 ① 因願
おんみはも とはの いにしへ、
法性の おんみやこ より、
法蔵と なのりいでまし、
おん教へ 饒王仏に
請ひまつり 仕へたまひて、
諸々の みほとけたちの
淨らけき 国々のさま、

その光り 量りもあらず、
辺り無く 得えらるる無く、
対ひ無く 炎の王と、
てる光り 淨らの光り、
歎ひの 智りの光り、
断ゆる無く、思ひをも超え
言葉をも遙かに離れ、
日も月もかくるる光り。
かくのごと奇しき光りを
教知らぬ国々に棲む
ありとある生の類
等しくも蒙りまつる。

(二) 衆生往生の因果 ① 因

弥陀仏の本つ願いの
名号こそは 聞く人をして
正しくぞ淨きみ国に
往かしむる奇しきみ業ぞ。
その御名をまごころをもて
信せしめ生まれしめんの
み誓ひの因ゆゑにこそ。

◎ 果

其の因と 其の生きの緒の
善き悪しき みそなはしつ、
上も無く殊に勝れし
おん願ひ 建てたまひては、
まれらなる 弘きみ誓ひ
世に超えて発しまし、
久しくも之を考へ、
未遂に之を成ります。
(物皆の終に安らふ)

奇しき御名 南無阿弥陀仏、
比ひ無き 淨けき御国。
重ねてぞ誓ひたまはく、
わが御名の世に限もなく
響きゆき 聞こえゆかんと。
遍ねくも 光り放たす。

◎ 果徳

ここに於て 仏の覚り
玉の緒の深みに宿し、
未遂に大き涅槃を
証すこと、阿弥陀ほとけの
物皆を覚らしめんの
おん願ひ 成りませばこそ。

三 依経段 「釈迦章」

(一) 総勸

釈迦如来 世に出でましし
故はたゞ阿弥陀ほとけの
おん願ひ 説きまさんとぞ。
濁り充つあさましき世の
ありとあるいのちの類、
信けまつれ如来のみ言、
永しへの 眞実のみ言。

(二) 信益

おん眞実うけて喜ぶ
眞実心の発る時しも、
煩惱を断たざるまに
涅槃をば得しめたまへれ。

◎ 不断得生

◎ 平等一味

生き死にに迷ふ人々、
逆らひて狂ふともがら、
み法すら謗るたくひも、
聖き道はげむひじりも、
おのづから心碎けて
みほとけに帰らまつれば、
百の川 海に入るとき
味はひの 一つなること、
等しくぞ同じ覺りの
おん恵み足らひて歩む。

◎ 心光照護

みすくひの光りは常に
照らしつつ護りませば、
已に能く無明の闇を
破りまし、闇は霽れたり。
貪りの・瞋りの・憎みの
雲霧は絶えまあらせず、
信心の天を覆ふも、
日の光り照りてしあれば、
雲霧の下明らけく
闇すでに無きが如しも。

◎ 横超五趣

中つ国 また日本の
すぐれたる僧の数々、
釈迦仏の世に出でましし
み意を顕はしまつり、
弥陀仏の本つ誓ひの
物皆に應へることを
明らかに示したまへり。

五 「別讚・竜樹章」

(一) 懸記

釈迦如来 楞伽山にて
もろびとに告らせたまはく、
竜樹菩薩 南印度に
出でたまひ、悉く能く
有りに立ち 無しに止まる
邪のを見を摧き、
大乘のこよなきみ法
宜り説きて、つゆ退かぬ
歡喜の地を証し
安らけき国に生まると。

(二) 論意

陸路をば行くに難しと

① 判法難易

信を獲て敬まはれつつ
おほらかに慶びぬれば
その時ぞ悪しき趣を
横さまに超えて截りつる。

◎ 諸仏称讚

およそ世に生くる人々、
善き悪しきへだてもあらず、
弥陀仏の弘きみ誓ひ
聞きまつり信じまつれば、
みほとけに いたく喜び、
勝れたる解りの人ぞ、
白蓮華・妙なる華と
名づけまし讃めしめたまふ。

◎ 結誠

弥陀仏の本つ願ひゆ
成りましし奇しき御名をば、
邪の 見にけがれ
橋ぶれる悪しき人々
まごころに受けまつること、
難きかな 難き極みぞ。

四 依 釈 段 「総 讚」

西のかたインドの論師、

頭はして 行くに易けき
船路をぞ信け樂はしむ。

◎ 弁機領受

弥陀仏の本つ願ひを
たまのをの深みに開きて
信けまつる即の時はやく
おのづからとはの涅槃に
至るべき身とは定まれ。
ただ常に如来の名号を
うけまつり称へまつりて、
はかりなきおん悲れみゆ
たてましし弘き誓ひの
おん恩み報へまつらん。

六 「天親章」

(一) 造論自帰

天親菩薩 浄土の論を
造りまし告らせたまはく、
碍り無き おほみひかりの
みほとけに帰らまつると。

(二) 論所明

釈迦仏のみ言に依りて

① 頭真実

ほとけにまかせ
敬まはれん

おん真実あらはしたまひ、
つかのまに悪しき趣を
超えしむる大き誓ひを
かがやかに明かしたまひつ。

㊦ 宣布一心

あまねくも 本つ願ひの
み力の廻向によりて
ものみなをすくはんために
一心を彰はしたまふ。

㊧ 帰入得益

おん功德みちあふれたる
宝海・御名に帰れば、
必ずや覺りをひらく
はらからの数につらなり、
蓮華淨きみ国に
至るとき即ち真如、
法性のおん身を証し、
煩惱の林に遊び
神通の力あらはし、
生き死にの園に入りて
応化の身自在に示す。

七 「曇鸞章」

(一) 行蹟

梁の王、曇鸞大師を
菩薩とぞ常に礼せし。
菩提流支 淨き教へを
曇鸞に授けまつれば、
仙術の書は焚きすて
安樂の邦を帰りつ。

(二) 解釈

天親の論を明かして、
弥陀仏の淨きみくには
往く因も開く覺りも
み誓ひに由ると願はし、
往くもまた還るもなべて
みほとけのみ力ゆゑぞ、
おん覺り正しく獲べき
因はただ信心・一つ、
迷ひては染れぬる人
信心の發るすなはち
生き死にを涅槃と証し、
曇り無き光りの国に

必ずや至り、普ねく
諸々の迷ひ漂よふ
いのちみなすくふと告らす。

八 「道綽章」

(一) 開顯法義・聖淨二門

聖道 証し難しと
決めつつ、道綽禪師、
ただ淨きみ土の道ぞ
往くべきと明かしたまへり。

(二) 二行賤勸

ありとある善きわざとても
自からの力ととらへ
修むるを虚しと賤し、
円けくも満ちたる徳の
おほ御名を ただひたすらに
称へよと勧めたまへり。

(三) 勸信顯益

信心の淳く淨けく
常なるを懇に誨し、
同じてぞ悲れみ誘ふ。
死ぬるまで悪を造れど、

み誓ひにまうあひぬれば、
安らけきみくに生まれ、
証すなり妙のさとりを。

九 「善導章」

(一) 独明仏意

釈迦仏の深きみこころ
ただ独り善導大師
明らかに示したまひつ。

(二) 撰化因縁

善きわざに励む人をも
悪しきわざに狂ふ人をも
矜しみ哀れみまして、
名号の父 光明の母
因となり 縁となりつつ
信心を獲しむと願かし、
弥陀仏の本つ願ひゆ
成りましし大智の海を
開きてぞ入れしめたまふ。

(三) 獲信利益

その海に入りまいらせつ、
金剛の心をいただき

慶喜の念 よろこび おもひ さやけく
み願ひに応ふ時しも、
章堤希とこころ等しく
喜びと智恵と信の
徳を獲て即ちつひに
法性の常の樂しみ
証すとぞのらせたまへる。

一〇 「源信章」

(一) 広開編婦

釈迦仏の広きみ教へ
うち開き 源信僧都
弥陀仏の安けきみくに
ひとへにぞ欣ひましまし、
もろびとを勧めたまへり。
(二) 專雜得失
ひたすらに御名を称ふる
心こそげにも深けれ、
余の行 添へ雜ふるは
浅しとぞ示したまひて、
きよらけき覺りのみくに
たまゆらの飯のみくにを

(二) 信疑得失

生き死にの迷ひの里に
さすらふは疑ひの故、
おんざとり寂けき樂
速やかに入るべき道は
信心のただひとすぢぞ。

一一 「結 勸」

(一) 結讀祖

み教へを弘めたまへる
聖者たち世々次々に
濁りみつ悪しき極みの
辺り無き生きの結たちを
あはれみつ濟はせたまふ。

(二) 勸時衆

いざさらば 世々のはらから
伝ふると伝へらるると
相共に心一つに
聖者らのこのみ教へを
ひとすぢに信じまつらむ。

☆ ☆ ☆

まさしくも云ひひらかせり。

(三) 顯示妙益

極まれる悪の人はも
唯だ御名を称へまつらな、
われもまたかのみほとけの
みすくひの中に在るなれ。
煩惱に眼障へられ、
み光りを見ずと雖も、
みほとけのおん悲れみは、
たまゆらも倦まず疲れず、
照らします 常に我が身を。

一一 「源空章」

(一) 開宗弘化

釈迦仏の教へあまねく
明かしまし、本師源空
善き悪しき人々すべて
憐れみつ、この島国に
真実のみをしへ興し、
弥陀仏の選ひ扱ひて
建てましし本つ願ひを
悪しき世に弘めたまへり。

蓮如上人『御聞書』

十月二十八日の晝夜に言わく

「正信偈・和讃をよみて、仏にも、聖人にもまいらせん
と思うがあさましや。他家には、勤をもして廻向するな
り。御一流には、他力信心をよく知れと思召して、聖人の
和讃にそのころをあそばされたり。ことに七高僧の御ね
んごうなる御釈の意を和讃に聞きつくるように遊ばされ
て、その恩をよく存知して、あらとうとやと念仏する
は、仏恩の御事と聖人の御前にてよろこび申すころな
り」とくれぐれ仰せられそうらいき。

……正信偈和讃は「衆生の弥を如来を一念にたのみまい
らせて、後生たすかり申せ」とのことわりをあそばされた
り。よくよくききわけて信をとりて「ありがたや／＼」と
聖人の御前にてよろこぶことなり」と、くれぐれ仰せ候な
り。

編集後記

チリ地震による大津波、罹災の方々に謹んで御見舞申し上げます。日本から地球上では一番遠い国の出来事がこんなにも早く、こんなにも強く影響することは、専門の方々にも知らなかつたこととは、罹災者の方々にはまことに氣の毒にあまることであります。

△横超断四流の近角先生の御講話は、大正五年の求道誌から頂きました。夏季求道会での教行信証の御講話の一片であります。ここに永劫流転の私共の姿を先生の御身にかけて御表白下さると共に、そのすくいを、一人もらさじの悲心から御述べ下さつてあります。くれぐれも大切に御身誂願います。

近角先生は「人生から真に信仰に徹底すれば、再び人生にその光りはあらわれて来るものである。そこは自然であるから信仰の結果についてはとくに語る必要はない」と仰言いました。これというのも私共が何時も結果ばかりに眼をつけて、ともしれば向利的、律法的迷路に迷いこむことを知り抜かれての御親切からであります。

△白井先生の正信偶意識は、慈光誌に昭和二十四年にも頂き得ましたが、今回あらしく頂きました。御労作の程深く御礼申し上げます。

△源左同行の心底を深く探られての辛川さ

んの原稿は、中外誌上で見出し、早速お許しを得て頂きました。ここに凡夫往生の姿、泥中に咲く蓮華の消息を浮き彫りにして下されたことを有難く思います。

○ 福島先生に丁度一年振りに御法話を頂きました。先生は東京都世田谷区上北沢三丁目一三一二番地に御移転になり、芝浦大学をお辞めになつて、山梨県の都留大学にお変わりになりました。

○ 足利浄円老師が去る五月廿五日京都市右京区山内御堂殿町、自照舎にて御永眠になりました。昨秋親しくお目にかかり、種々とお教を仰ぎましたのに、悲しいことでありませう。

○ 又東京の浅井健治郎さんも急逝されました。謹んでお悔み申し上げます。

われやさき人やさきなる世ながらに変わらぬ慈悲にすくわれて行く身はたといあしたの露と消えぬともころは永久に華のうてなにかにせんすべなき身をひとすじにとほるみのりにつらぬかれぬる

白杵祖山師

新刊紹介

異義史之研究

住田智見著。定価 一五〇〇円、送料 五五円。

発行所、京都市中央局区油小路六条南入ル。丁子屋書店。
発売所、名古屋市中区南大津通四ノ二。其弘堂書店。
本書は真宗の異義について、元祖法然門下の異流から現代の異義までを詳述し、大系づけられたものであります。

御案内

毎月、第一、二、三日曜日午後一時半、真宗講話。一道会館。
毎月廿四日、午前、午后、法話会。
昭和区小椋町、教西寺。

定価	一部	二十円(送共)
	半年	百二十円(送共)
	一年	二百四十円(送共)
編集・発行人	花田正夫	
印刷人	本田政雄	
発行所	慈光社	
振替口座	名古屋一〇四七〇番	